FUKUI PREFECTURAL MUSEUM NEWS

ふくいミュージアム

2023.9.14　No.68

令和５年度秋季特別展

描かれた川と人々 ～越前･若狭の利水の歴史～

川は、現在のわたしたちの生活に欠かせないものです。しかしながら、それを実感する人はそこまで多くないかもしれません。日本においては、川は生活用水や農業用水、工業用水、水力発電の水源として利用されるなど、わたしたちと密接な関わりを持っています。

過去に目を向けると、川は生活用水や農業用水のほかにも、人や物を舟で運ぶ舟運や、漁業を行う場としてなど、現在よりも多様な形で利用されていました。それは、いったいどのような様子だったのでしょうか。

かつての川の利用の様子を示す資料として、古文書や写真がある一方で、それを絵画的に描いた絵図や地図があります。本展では、主に、江戸時代以降の川や、川を利用する人々を描いた絵図や地図を中心に展示します。生活に欠かせない川の利用の様子やその変化を知ることで、地域の歴史や文化を再発見するきっかけになれば幸いです。

１.川と日本人

日本では、弥生時代に稲作が普及したことで、川魚の漁や川舟での移動とともに、農業用水を中心とした川の利用がみられるようになりました。

日本において川の利用が盛んになるのは、江戸時代からとされます。戦乱の世が終わり、安定した社会が訪れると、人口が増大するとともに、これまで開発されていなかった土地を新田として開発し、人々が広く集落を形成し生活するようになったことが背景にあります。

江戸時代は石高制でもあったことから、稲作に不可

乗興舟（部分、大倉集古館蔵、伊藤若冲作、淀川下りの感興を作品にしたもの）

欠な農業用水の重要性が増すとともに、より多くの人々が農業用水として川を利用するようになりました。

また、広範囲の集落を移動するため、舟運も盛んに行なわれるようになりました。川舟での移動は、波が少なく穏やかで、ゆったりと流れていく景色を眺めることができ、画家や文人にも好まれました。江戸時代に生きた画家伊藤若冲は、川舟で淀川を下った際の感興を、拓版画という技法を用いて表現しました。川舟の利用は全国各地で見られましたが、その背景には川舟の便利さや、こうした快適さがあったと考えられます。

明治時代になると、川は農業用水や舟運の輸送路、漁業の場としてのほか、水力発電の水源としても利用されるようになりました。明治時代の終わりになると、より早く目的地に着く鉄道の普及もあり、舟運利用が減少する一方で、工業用水としての川の利用が増加しました。

第二次世界大戦後は、復興や経済成長のため、水力発電の水源や工業用水の需要がますます増大しました。こうした需要を満たす手段としてダム開発がありました。ダムは、川の水量が豊富なときには水を貯留し、渇水時には水を放流するなど、川の水量調節によって新たな水利用を可能にしました。

1990年代になると、工業開発による水質汚染が問題となり、「環境」に対する配慮が必要とされました。ここでの「環境」とは、水質だけでなく、生態系なども含んだもので、こうした「環境」に配慮した河川の政策、整備が必要とされました。さらに近年には、川を親水空間などとして、川の水だけではなく、川という「空間」そのものを活用しようとする動きが出てきました。

このように日本における川の利用は、時代とともに変化してきました。本章では、日本人の川利用の様子を、日本各地の資料から概観します。

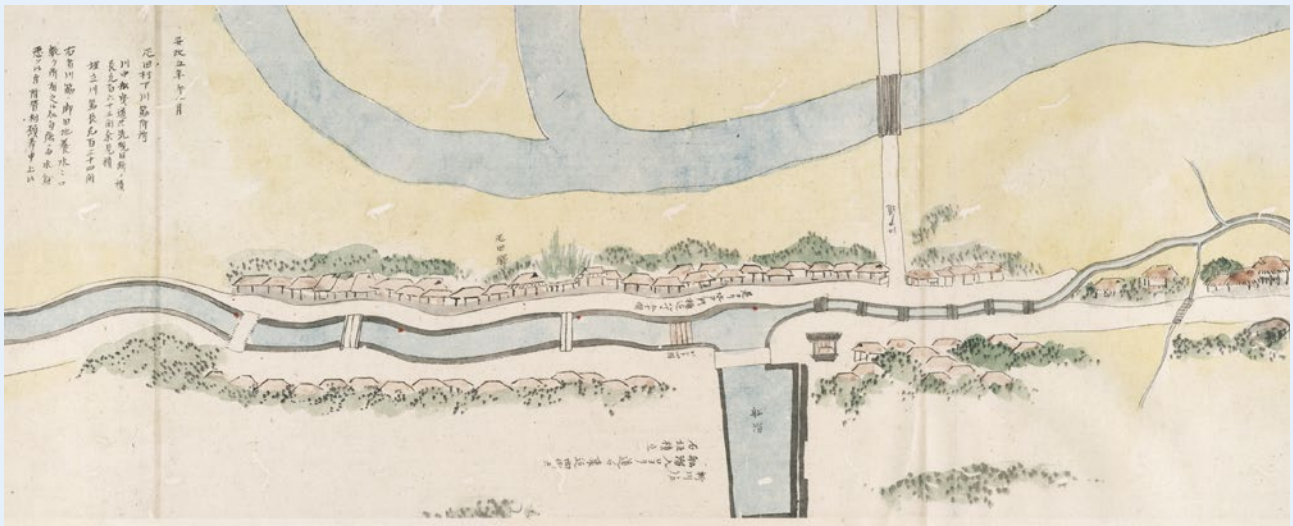
2. 越前・若狭の川

福井県内(旧越前国と若狭国)には、現在200以上の川があります。江戸時代以降、川の状況を把握したり、あるいは工事を行うために、川を描いた資料が各地で作成されました。

越前国の代表的な川として、九頭竜川、足羽川、日野川があります。

九頭竜川は、農業用水や舟運の輸送路としてのみならず、福井城下の飲料水(芝原上水)などとして利用されました。足羽川では、福井城下で使用する木材を筏にして運搬する筏流しがなされ、その様子は福井藩内にて4月の代表的な行事として知られていました。日野川においては、日野川流域最大の農業用水である松ヶ鼻用水が引かれるなど、農業用水としての利用が盛んになされました。

また敦賀に流れる笙の川の上流、現在の疋田地区に、舟川と称される川があります。江戸時代には、北前船で敦賀湊に運ばれる大量の物資をより効率よく京都へ運ぶため、敦賀と琵琶湖をつなぐ運河の開削を目指す機運が高まりました。文化13年(1816)に小浜藩などにより川が開削され、これにより敦賀湊から疋田までは舟で、疋田からは牛車で琵琶湖へ物資が運搬さ



越前敦賀庄之川尻ヨリ深坂山中追分辻迄(部分、国指定重要文化財、高樹文庫蔵、射水市新湊博物館保管、幕末頃の舟川の様子を描いている)

れるようになりました。疋田への舟運はその後一旦廃止されましたが、幕末には日本近海に外国船が現れたことで、京都への物資輸送路確保のため、改めて安政2年(1855)に舟川は整備され、舟運が再開されました。舟川は最終的には慶応2年(1866)に廃止されました。敦賀と琵琶湖をつなぐ運河の開削はその後も計画されましたが、実現することはありませんでした。しかし、日本海と琵琶湖をつなぐ輸送路は、明治14年(1881)の長浜―敦賀間の鉄道開通という形で実現します。これは、県内において、舟運から鉄道による陸上輸送に切り替わっていく契機でもありました。

若狭国においても、遠敷郡の遠敷川や木谷川、三方郡の串子川や八幡川といった川があり、これらを描いた絵図が残されています。若狭国の中でも主だった川として、小浜城下を流れる北川、南川があります。小浜城はこのふたつの川の間に築城され、北川、南川は天然の外堀として、防御に利用されていました。南川では舟運や筏流しも行われました。北川では、断続的な堤防(霞堤)が築造され、それは現在でもみることができます。霞堤は川の水を意図的にあふれさせることで、市街地を守る堤防が壊れないようにするとともに、生物たちを水路などに避難させる役割を持っています。北川では現在、増水した川の水を、生態系の保全に活用しているといえます。

本章では、越前・若狭の川をいくつか取り上げて、各川の特徴やその利用の様子を紹介します。

3.川と暮らしの景観

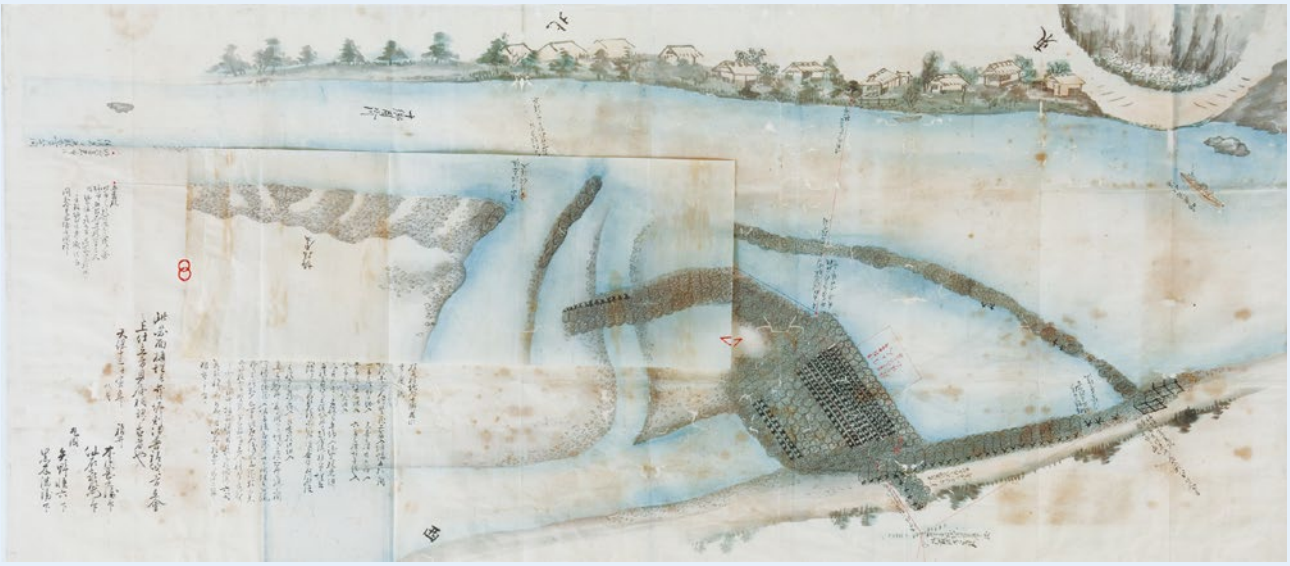
江戸時代には、川だけでなく、それを利用する人々が描かれた資料も多数作成されました。

たとえば、県下最大の農業用水として知られる、十郷用水の取水口である鳴鹿大堰を描いた絵図が挙げられます。十郷用水は、開削からおよそ千年にわたる歴史をもつ用水で、今なお九頭竜川から取水しています。天保13年(1842)頃の様子を描いたこの絵図には、竹や石を利用し水を堰き止めている様子が細かく描かれています。アスファルトやセメントがなかった当時においては、こうした材料を使用していたことがわかります。この絵図には、鳴鹿大堰のほかにも、渡し舟に乗って移動する人や、川岸に建ち並ぶ茅葺の家々、川岸にもう一艘舟が泊められている景観が描かれています。川舟には、船頭のほかに、乗客が一人と馬が一頭乗っているなど、細かく描かれています。

また、日野川から取水する松ヶ鼻用水を描いた絵図には、水を利用する集落の景観が鮮やかに描かれています。松ヶ鼻用水は水不足に悩む用水であったことから、人々は湧水地を掘り下げて溜め池をつくる場合もあり、絵図にもその様子が描かれています。

ほかにも多数の資料を展示しますが、そこには、文字資料だけではうかがえない、具体的な川の利用の様子や、川を利用する人々の暮らしの景観が描かれています。本章では、そうした点に注目し、川を利用する人々やその暮らしの景観を紹介します。

(伊藤大生)



十郷用水樋埋仕方大方之図(部分、九頭竜川鳴鹿土地改良区蔵、当館保管、天保13年頃の鳴鹿大堰の様子を描いている)

特集 「歴史の扉」～学芸員による福井新聞への寄稿②～

令和3年度より、福井新聞に福井県の文化施設の職員が寄稿しています。福井県立歴史博物館の学芸員は、新聞に月に1回掲載される「歴史の扉」欄で、日々の調査の中で気がついた面白いこと、楽しいことなどを執筆しています。福井新聞社より「歴史の扉」の画像提供とご協力を得て、過去に掲載された「歴史の扉」を紹介させていただきます。

令和4年（2022年）6月25日（土曜日）

歴史の扉 福井県立歴史博物館

「復興博覧会」面影今も

瓜生由起総括学芸員（中・近世石造物）

みなさんは、「福井復興博覧会」を知っていますか？いまから70年前、昭和27（1952）年の4月10日から6月25日まで、福井県と福井市の主催により開催された博覧会です。おもに福井空襲（昭和20年7月19日）、福井震災（同23年6月28日）の被害からの復興を記念したもので、空襲から7年、震災から4年、人々の復興の努力の末の開催でした。

会場は2カ所あり、第1会場は現在の福井大学文京キャンパス、第2会場は足羽山公園でした。第1会場に41、第2会場に19の展示施設や遊具が設置されました。「繊維博」という別名も付けられ、街の復興とともに県内の繊維産業の復興を大々的にアピールする場でもありました。

では、会場をのぞいてみましょう。第1会場には繊維産業を中心に、農林水産業や郷土の開発計画などのテーマ館のほか、芸能ホールやイベント会場が開設されました。第2会場は子どもたちに向けて、郷土博物館、「おとぎの国」、動物園などの施設、飛行塔、豆汽車などの遊具が設置されていて楽しそうです。博覧会の期間中、入場者総数は約97万人に上りました。

賑わったのは、会場だけではありません。会場が福井市街地の北（第1会場）と南（第2会場）にあり、博覧会に向かう人々は町を歩いて移動しました。そのため、福井駅前をはじめ、移動の道筋の本町、呉服町などの商店街も博覧会に訪れる人々を歓迎し、町全体が盛り上がりました。

博覧会終了後も、遺産は受け継がれています。第1会場は福井大学の敷地に組み込まれ、博覧会の噴水は平成18（2006）年まで学内に残されていました。第2会場の足羽山では、郷土博物館の建物が現在も福井市自然史博物館の一部として活用され、周辺の階段や公園も当時の面影を残しています。

身近な場所に復興博覧会への「歴史の扉」があります。その扉をそっと開いて、博覧会の賑わいとともに、被災から復興までの道のりを感じ取ってもらえればと思います。県立歴史博物館では写真展「福井復興博覧会」を9月13日まで開催中です。

❶第1会場の地図❷第2会場の地図＝ともに「福井復興博覧会ご案内」（昭和27年、県立歴史博物館蔵）より

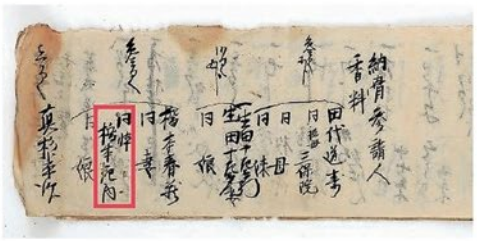
福井新聞 ©福井新聞社 無断複製・転載を禁じます

令和4年（2022年）5月28日（土曜日）

歴史の扉 福井県立歴史博物館

見方変え調査 新発見

大河内勇介学芸員（日本中世史）



4歳の橋本左内の名前（示い四角の部分）が記された資料（田代家文書・県立歴史博物館蔵）

3月27日の「歴史の扉」では、戦国時代に越前を治めた朝倉氏の家臣で、大太刀使いとして有名な真柄十郎左衛門の新資料を紹介しました。この新資料は、真柄十郎左衛門の一族の子孫が福井藩の田代家として存続したため、同家文書約90点のうちの一つとして伝来したものです。

橋本左内（国立国会図書館近代日本人の肖像）

当館では2021年2月にこの田代家文書を入手したのち、真柄十郎左衛門の新資料の分析を進めていましたが、その途中、他の重要な資料も含まれていることに気づきました。

実は、田代家は、「啓発録」で有名な幕末の志士、橋本左内の父長綱の実家になります。長綱は田代家から橋本家に養子に入っていました。その観点から田代家文書を調査すると、なんと左内の新資料を発見したのです。見方を変えて調査をすると、また別の発見があったというわけです。

さて、その新資料は、左内が4歳で「左内」と称していたことを示す貴重なものでした。田代家文書の別の資料では、左内の祖父田代春綱が幼少に「左内」と称したとあり、この祖父の影響を受けているかもしれません。また、6～12歳前後の元服（成人の儀式）の際、名前を変えるのが一般的でしたが、左内は安政の大獄により26歳で亡くなるまで「左内」と称していたことも判明しました。「左内」という名前の由来や使われ方が見えてきたのです。

さらには、田代家文書から、田代家の詳細な系図を完成させることもできました。それにより、左内の系譜が明らかとなり、左内と真柄十郎左衛門が遠い親戚であったことも浮かび上がってきました。血は直接つながらないものの、家としては時を隔ててつながっていたのです。調査を進めた私自身が「本当かな」と驚きましたが、「歴史は小説より奇なり」かもしれません。

田代家文書は、真柄十郎左衛門のみならず、左内に関する新事実の発見につながる重要な資料だったのです。今後、調査が進むと、更なる発見があるかもしれませんね。

福井新聞 ©福井新聞社 無断複製・転載を禁じます

令和4年（2022年）8月27日（土曜日）

明治時代の鳴ヶ崎海水浴場（敦賀）の写真（福井県立歴史博物館蔵）

歴史の扉
福井県立歴史博物館

伊藤大生学芸員（歴史地理学）

海水浴場、昔は岩場に

夏といえば海水浴、そして、海水浴場といえば「砂浜」にあるのが当たり前です。しかし昔は、海水浴場は「砂浜」ではなく、岩に囲まれた「岩場」にあるのがよいとされていました。

日本では、海水を浴びたり、海につかったりすることを「潮湯治」などとよび、海につかる人は病や健康に不安を抱える人、あるいは海女さんや漁師など海で仕事をする人に限られていました。

海水浴という言葉は、幕末に外国から伝わった医学書が翻訳される中で初めて使われました。そして、海水浴は潮湯治と同じく、健康になることを目的としたものでした。

日本では明治時代以降、海水浴場の設置が進められます。明治14（1881）年に内務省が発行した雑誌では、海水浴場には、①都会の空気が入ってこない綺麗な空気、②神経を活性化させる塩分の濃い海水、③血の流れを良くする強い波の三つがあることが重要とあります。

とくに、強い波を受けることができるのは、波静かな「砂浜」ではなく、現在では危ないとされるような「岩場」でした。写真を見ると、当時の海水浴の様子がよく分かります。人々が岩に囲まれた海水に、まるで温泉のようにつかっています。

一方で、幕末から明治時代にかけて来日した外国人たちは、気分のリフレッシュを目的として、現在の私たちのように「砂浜」で遊んだり、海で泳いだりして楽しんでいました。彼らは健康であり、強い波もいらないので、「岩場」にいる必要はありませんでした。むしろ彼らにとっては、「砂浜」のほうが安全に海を楽しめるよい場所だったのです。

こうした健康な人たちも海で楽しむことを、鉄道会社などは「海水浴」として、明治時代の終わり頃から国内に広めていきます。そして、全国各地の「砂浜」に海水浴場がみられるようになり、人々は鉄道などを使って訪れるようになりました。

今は当たり前になっていることでも、かつてはそうではないことに、歴史の扉を開くことで気がつきます。海水浴場の場所も、その一つの例といえます。

福井新聞　©福井新聞社　無断複製・転載を禁じます

令和4年（2022年）7月23日（土曜日）

善正寺（福井市）にあった乗物

歴史の扉
福井県立歴史博物館

有馬香織学芸員（歴史資料）

豪華そうな駕籠、重さは

私は歴史の勉強をしていますが、今、ひょんなことから福井県内の「駕籠」のことを調べています。

「駕籠」は、江戸時代から昭和30年代頃まで、わりと長く使われていた人力の移動手段です。時代劇にも出てくるので、「駕籠」と聞いてすぐにイメージを想像できる人も多いかもしれません。

「駕籠」とおおざっぱに言いましたが、「駕籠」の中でも高級なものを「乗物」といいます。ですから、殿様や姫様が乗る駕籠は、「乗物」と呼ぶ方が正しいようです。

そのような駕籠や乗物を今も持ち伝えているのは、お店であったり、個人のお宅であったり、博物館であったりと様々ですが、最も多く伝わっているのは、お寺です（宗派を問わず）。

お寺の駕籠は、駕籠の中でも高級な「乗物」の方で、お堂の高い天井に吊られていたり、お堂の奥に置かれていたりします。吊ってある場合の方が多いかもしれません。

調査に行った先で一番よく聞かれるのは、「駕籠は重いのか？」ということです。

特に駕籠の中でも乗物は大きくて、金具もついて漆も塗られていて豪華に見えるので、重たそうです。それが天井に吊られているのだから不思議かもしれません。

そこで、量ってみました。写真の乗物は、担ぎ棒や金具全部付いた状態で、34・5キロでした。他の乗物10挺も計測してみると、付属品も担ぎ棒も付いた状態で20キロ台から40キロ台の間でした。

意外と軽いのは、立派にみえる担ぎ棒も中が空洞であったり、本体の側面もわりと薄い板が主で補強がされてあったりと、極限まで軽量化の工夫がされているからです。

人を乗せて運ぶのですから重くてはいけないので、当然といえば当然ですね。天井に吊ってある駕籠は、空は飛ばないけれども、見た目ほど重くはないようです。それでも高所から落下すれば危ないので、落ちそうな場合はお気を付けて。

福井新聞　©福井新聞社　無断複製・転載を禁じます

令和4年（2022年）10月22日（土曜日）

歴史の扉
福井県立歴史博物館

百貨店 流行の発信地

橋本紘希学芸員（近現代史）

みなさんは、日本で百貨店がいつできたのか知っていますか？ それは、今から120年ほど前の、明治時代の終わりごろのことです。

百貨店は、流行の発信地でした。人びとの好みを調べて生み出された、新しいデザインの服や日用品が、百貨店のPR誌を通じて社会に伝えられました。PR誌には、通信販売のコーナーもあり、東京や大阪に住んでいなくても、商品を買うことができました。

また、百貨店では、色々なイベントも開かれました。1927（昭和2）年に、大阪の高島屋で開催された「日光博覧会」というイベントでは、20万人が訪れる日もあったほどのにぎわいを見せました。

上だるま屋別館の「コドモの国」＝福井市　下1932年に建てられたMODE大井ビル（旧大井百貨店）＝越前市

多くの人びとが百貨店を訪れ、流行の品を買ったり、イベントを楽しんだりしました。百貨店は、都市の華やかさや豊かな生活を身近に感じることができる場所だったのです。

福井県内に百貨店ができたのは、1928年のことです。この年の7月6日に、福井市に「だるま屋」が誕生しました。

だるま屋をはじめた坪川信一は、学校の先生などをしていた人です。そのため、だるま屋では、遊園地の「コドモの国」を作ったり、新しく小学校に入った子どもたちにプレゼントを配ったりするなど、子どもを大切にしました。当時の子どもたちの楽しみは、「コドモの国」で遊んだ後に、食堂でお子様ランチを食べ、おもちゃ売り場を見ることでした。

だるま屋には、若い女の人が舞台で歌ったり、おどったりする少女歌劇もつくられ、訪れた人びとは、福井という都市の楽しさや豊かさを味わうことができました。

だるま屋に続いて、県内に次々と百貨店ができました。武生町（現在の越前市）にできた大井百貨店もその一つです。1933年の武生町の絵図にもその建物がえがかれており、町のシンボルの一つであったことが分かります。

福井県立歴史博物館では、11月27日まで、「百貨店の近代～文化と娯楽の花咲くところ～」を開催しています。日本と福井の百貨店のあゆみを物語る資料が展示されています。ぜひおこしください。

福井新聞　©福井新聞社　無断複製・転載を禁じます

令和4年（2022年）9月24日（土曜日）

歴史の扉
福井県立歴史博物館

笏谷石 秀吉も好んだ

大河内勇介学芸員（日本中世史）

みなさま、福井の名石、笏谷石をご存じでしょうか。

笏谷石は福井市の足羽山から採掘されていた石です。淡い青みを帯び、水に濡れると深い青色に変化することから、青石とも呼ばれました。古くから生活の中で利用され、江戸時代には福井の特産品として北前船などで全国に運ばれました。

今日ここで紹介したいのは、歴史上のあの人物も、笏谷石を好んでいたという点です。その人物とは、戦国時代に天下統一を果たした、豊臣秀吉なのです。

博物館では、令和2（2020）年に豊臣秀吉朱印状という資料を購入しました。それは、秀吉から、越前の北庄城・東郷城・府中城の人々へ宛てた指令書で、秀吉の朱印が捺されています。

秀吉は指令書で次のように述べます。「去年、私が北庄で指示した切石550個について、きっと用意ができているでしょうから、数を点検し、急いで京都へ運びなさい」と。

北庄の切石とは、北庄付近の足羽山から切り出した加工のしやすい石、すなわち笏谷石を指します。それを550個も京都へ運べというのです。それでは、このころ秀吉は京都で何をしていたのでしょうか。この資料の年代が天正14（1586）年と考えられることから、秀吉が京都で邸宅と政庁を兼ねる聚楽第の建設を進めていた時期と分かります。秀吉は越前の笏谷石に目をつけ、その青い輝きを聚楽第に活用しようとしたのかもしれません。

この資料の内容は、以前から紹介されていましたが、原本が行方不明になっていたこともあり、これまで十分に分析がなされていませんでした。今回、原本が再発見され、研究が進められることで、秀吉が笏谷石を利用しようとしていたことが改めて浮かび上がってきたのです。

豊臣秀吉朱印状（一部）

秀吉と笏谷石の関係を示す資料（文献）は、これを含めて2点しかなく、検討の余地がありますが、戦国時代の天下人が越前の笏谷石を好んでいたことも、後世での笏谷石の普及につながったのかもしれません。

福井新聞　©福井新聞社　無断複製・転載を禁じます

令和4年（2022年）12月24日（土曜日）

歴史の扉
福井県立歴史博物館

逆境耐え生まれた芸術

有馬香織学芸員（中世史・文化財）

私には、時々無性に「会いたくなる」文化財がありますが、今回は、その一つで博物館の収蔵庫にあるのに、知られていない品を紹介します。

その名は「短冊手鑑」。和歌を書いた短冊を貼って一冊にまとめた本です。博物館に転勤して早々、「どこにありますか」と先輩の職員に聞いてしまったほど愛している一品です。

「短冊手鑑」の美しく繊細な銀の金具

なぜ一見すると地味なこの品に魅かれるのか。それは、これが17世紀初頭の最高文化人である後水尾法皇がお抱えの最高の職人に作らせた品で、その時代の金泥絵、文字、織、金工の芸術の頂点の「基準」だからです。私の中では、近世初期の作品を見る際の文化を計る「ものさし」の一つとして、大事な「基準」なのです。

画像は、表紙に付いている銀金具です。「人の手でどうしてこんなに美しい物を生み出せるのかしら」と感動するほどの細かさと優雅さが特徴です。

さて、この手鑑を作らせた後水尾法皇の正室である東福門院和子の父は、将軍徳川秀忠（越前の結城秀康の弟）です。父の家康に比べて地味と思われがちですが、この人の政治手腕は相当で、徳川の世の基礎をしっかり作ったなかなかの人物です。その秀忠から朝廷への数々の抑圧に耐えに耐え、逆に開き直って武家政権が到底及ぶことができない都の文化の粋を追求したのが後水尾法皇です。

その人が制作プロデュースした短冊手鑑が一流でないはずはないですよね。想像をたくましくすれば、「徳川家に政治ではやられたけれども、文化の頂点はこちらにあり」という意図が見えなくもない品ですが、法皇を生涯支えた東福門院は、徳川家光の側近であった若狭小浜藩主で大老の酒井忠勝が晩年病床に臥していた折に、お見舞いの品としてこの手鑑を贈りました。（なぜ東福門院は夫の作った品を幕府方の忠勝に贈り、もらった忠勝は何を感じただろう。私も小説を書いてみたい）

今、縁あって福井県にあるこの手鑑を開くたびに、私は「よくぞ400年、今まで伝わってきてくれたね」と、そっと心の中で語りかけています。

福井新聞　©福井新聞社　無断複製・転載を禁じます

令和4年（2022年）11月26日（土曜日）

歴史の扉
福井県立歴史博物館

商店街 そこだけの風景

伊藤大生学芸員（歴史地理学）

みなさんは、商店街を歩いて買い物をしたことはありますか？　商店街と聞くと、たくさんのお店が並んでいる風景を思い浮かべるかもしれません。しかし、お店が並んでいれば商店街になるわけではありません。

商店街には、入り口にアーチがあったり、お店をつなぐアーケード（屋根）があったり、あるいは商店街全体におしゃれな街灯があったりします。また、商店街のなかのいくつものお店で同時に大安売りをしたり、福引などのイベントを行ったりします。こうした、個々のお店の垣根を超えて、全体でひとつの買い物空間となっている場所が「商店街」とされます。

商店街は明治時代以降、各地にみられるようになります。そのころの日本では、農村から都市部に働きに出た人が多くいました。その中には、お店を開いて食料品（米や野菜など）や日用品（衣類や履物など）の販売を始める人もいました。

当時は、お互いに販売する商品が同じだったり、あるいは商売のノウハウがなかったため、商品があまり売れないことが多くありました。そこで、お店を営む人々は、お互いに資金を貸し借りしながら、販売するものが同じにならないように商品を仕入れたり、より多くのお客さんに来てもらえるよう一緒にイベントを企画するなど協力するようになりました。

昭和59（1984）年の片町商店街の風景写真（福井県立歴史博物館蔵）＝福井市

さらに、商店街全体で買い物をしてもらうため、アーチやアーケード、街灯などを整備して、全体をひとつの買い物空間と思ってもらえるよう工夫しました。こうして生まれたのが商店街でした。

とくに、アーチやアーケード、街灯などは、商店街のシンボルでもあり、その商店街にしかない個性豊かな風景をつくりだしていました。

そこにしかない風景は、旅行などで訪れた人にとっても魅力的に映るのではないでしょうか。商店街の風景は、これからのまちづくりの参考になると考えています。福井県立歴史博物館では、写真展「商店街の風景」を12月27日まで開催中です。

福井新聞　©福井新聞社　無断複製・転載を禁じます

博物館日誌（令和5年3月～8月）

3月

- 2日(木)
  三国西小学校３年生　団体見学
- 5日(日)
  北陸新幹線開業カウントダウンイベント　出展（フェニックスプラザ）
- 11日(土)
  企画展「越前の絵馬～館蔵資料を中心に～」オープン（～5月7日）
- 19日(日)
  企画展「越前の絵馬」展示解説
- 20日(月)
  北陸中学校２年生　団体見学
- 23日(木)
  昭和の暮らし模様替え（春）

4月

- 1日(土)
  収蔵品データベース公開開始
- 12日(水)
  越前市武生公会堂記念館　来館（資料借用）
- 13日(木)
  特別公開「姉川合戦図屏風」スタート（2階歴史ゾーン。～5月7日）
- 15日(土)
  ふくい歴博講座「徳川の世と浅井三姉妹」
- 20日(木)
  福井県教育庁生涯学習・文化財課　来館（資料調査）
- 23日(日)
  結城秀康坐像展示 除幕式
- 28日(金)
  武生西小学校 4年生、武生南小学校 3年生、金沢高等学校 団体見学
- 29日(土)
  企画展「越前の絵馬」展示解説

5月

- 2日(火)
  豊小学校3・4年生　団体見学
- 3日(水祝)
  企画展「越前の絵馬」展示解説
- 6日(土)
  ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験！昭和のあそび～春編～」
- 9日(火)
  写真展「没後100年 御用写真師・丸木利陽とその作品」終了（1月3日～）
  加賀市立金明小学校 3・4年生　団体見学
- 11日(木)
  写真展「思い出の北陸本線～令和6年春 北陸新幹線福井・敦賀開業に向けて～」（～9月12日）
- 16日(火)
  明新小学校4年生　団体見学
- 18日(木)
  国高小学校3年生　団体見学
- 24日(水)
  館内メンテナンスのため休館（～6月2日）

6月

- 3日(土)
  2階歴史ゾーン発掘速報コーナー展示替え
- 6日(火)
  上志比中学校2年生　団体見学
- 16日(金)
  滋賀県立安土城考古博物館　来館（資料返却）
- 19日(月)
  福井大学　団体見学
- 20日(火)
  越前市教育委員会　来館（資料返却）
- 22日(木)
  東郷小学校6年生　団体見学
- 30日(金)
  若狭歴史博物館　来館（資料調査）

7月

- 7日(金)
  一乗谷朝倉氏遺跡博物館　来館（資料借用）
- 10日(月)
  石川県立歴史博物館　来館（資料借用）
- 11日(火)
  中央中学校特別支援学級　団体見学
- 13日(木)
  昭和のくらし模様替え（夏）
- 19日(水)
  福井県博物館協議会理事会および総会・研修会
- 29日(土)
  特別展「「鬼柴田」勝家の実像～武勇と統治に長けた忠義の臣～」開会式・内覧会・オープン（～9月3日）

8月

- 6日(日)
  特別展「「鬼柴田」勝家の実像」特別講演「秀吉と勝家～賤ケ岳に至る両将の葛藤～」（淡海歴史文化研究所　所長　太田浩司先生）
- 11日(金)
  特別展「「鬼柴田」勝家の実像」展示解説
- 18日(金)
  博物館実習（～8月22日）
- 19日(土)
  特別展「「鬼柴田」勝家の実像」展示解説
- 20日(日)
  ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験！昭和のあそび～夏編～」
  特別展「「鬼柴田」勝家の実像」特別講演「井戸茶碗とは～青井戸茶碗 銘 柴田から考える～」（根津美術館　顧問　西田宏子先生）
- 24日(木)
  京都女子大学　団体見学
- 26日(土)
  ふくいれきはく講座「「鬼柴田」勝家の実像」

ミュージアム・サポーターズクラブ主催「体験！昭和のあそび～夏編～」（令和5年8月20日）

秋季特別展

描かれた川と人々
～越前・若狭の利水の歴史～

開催期間：令和5年10月21日(土)～11月26日(日)
※会期中無休
観 覧 料：一般400円　大学・高校生300円
小中学生・70歳以上の方200円
※20名以上の団体は2割引

※会期・内容は、予告なく変更される場合があります。
公式サイトなどで最新の情報をご確認の上、ご来館くださいますようお願い申し上げます。

［編集・発行］
福井県立歴史博物館
〒910-0016 福井市大宮 2-19-15　TEL.0776-22-4675 (代)
https://www.pref.fukui.lg.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム
No.68　令和5年9月14日発行